

野球盤に映る憧れの野球 ―1931年考案「実戦野球盤」

今回紹介する「実戦野球盤」(写真①)は、1931(昭和6)年に考案されたものである。

実際に盤面を見ると、ダイヤモンド型のグラウンドや守備位置が細かく表現されているだけでなく、「1 BASE HIT」「FOULOUT」「コーチャーサイン」といった表示も設けられており、野球の試合展開を盤上で再現しようとする工夫が見られる。現在のプラスチック製玩具とは異なり、本体には木や金属が使用され、箱には紙製の化粧箱が用いられている。こうした素材構成からは、昭和初期の玩具にみられる手工業的な特徴もうかがえる。大量生産された現代玩具とは異なり、どこか工芸品のような雰囲気を持っている点も興味深い。

外箱には「EVER-NEW」のロゴが確認できる。株式会社エバニューの公式沿革(注)によれば、考案者の岩井は、関東大震災後に勤務先であった玩具店「増田屋」からスポーツ用具分野への転身を決意し、暖簾分けを受ける形で、1924

(大正13)年に金属運動具製造卸「増新商店」を創業した。その後、「増々新しい」という意味を英語化した「EVERNEW」という商標を1933(昭和8)年に誕生させている。

興味深いのは、1931年考案の「実戦野球盤」の外箱にも、すでに「EVER-NEW」の文字が確認できる点である。つまり岩井は、正式に商標化される以前から「EVER-NEW」という名称を使用し、この野球盤に英語の商標を積極的に取り入れようとしていた可能性が考えられる。

公式沿革には、「当時横文字の商標はきわめて珍しいものでした」との記述も見られる。こうした点から、アメリカ生まれのスポーツである野球や英語、アメリカ文化への親しみが重なり合いながら、この「実戦野球盤」が生み出されていたこともうかがえる。

改めて資料をよく見ると、箱の装飾には東京六大学野球の各校のイニシャルも描かれている。1930年代の日本では、東京六大学野球が人気を集め、新

聞や雑誌ではスター選手たちが大きく取り上げられていた。まだテレビのない時代、人々は新聞記事やラジオ放送を通して野球を想像しながら楽しんでいた。「実戦野球盤」は、「実戦」の名が示す通り、そうした想像の野球を実際の形に変える道具だったと言えるだろう。

戦後になると、野球盤はエポック社製品などによってさらに発展し、「消える魔球」など娯楽性を強めていく。そして現代では、「野球盤 3Dエース スタンダード 侍ジャパン 野球日本代表ver.」(写真③)のように、国際大会の人気を背景とした商品も登場している。

戦前の家庭では、六大学野球のスター選手に思いを重ねながら盤を囲み、現代では侍ジャパンの選手たちを思い浮かべながら遊ぶ。時代ごとに憧れの野球の姿や、おもちゃの役割は変化しているが「野球を遊びの中で身近に感じたい」という人々の思いは、形を変えながら受け継がれているのである。

公益財団法人 野球殿堂博物館
事業部 学芸員 太田若葉



①1931年考案「実戦野球盤」



②「実戦野球盤」盤面部分



③野球盤 3Dエース スタンダード 侍ジャパン 野球日本代表ver.」(2020年発売)